

巻 頭 言

東京大学大学院数理科学研究科

舟木 直久

東日本大震災から2年余りが経過しましたが、福島第一原発は、いまだ不安定な状況にあります。被災された方々には改めてお見舞い申し上げます。『日本数学会理事会声明——東日本大震災に際して』（2011年6月12日）では「科学者の一員として、科学技術政策への数学者の関わり方は十分であったか、そして数学者として今後貢献できることは何かを、私たちは真摯に自問していこうと思います」と述べています。この精神は忘れることなく受け継いでいかねばならないと考えています。

実は、申し上げるのも憚られることですが、年会時に開かれる総会に出席するのは今回が初めてでしたが、あろうことかその場で次期理事長に指名されてしまいました。大変な戸惑いを感じています。もとより、私はこうした大役が務まるような者ではありません。会員の皆様方のご支援、理事会そして事務局の方々のご指導やご助言を頼りに、何とか乗り切って参りたいと考えております。どうかよろしくお願いいたします。

日本数学会の活動目標は、言うまでもなく、数学の研究の振興や数学の普及を図ることにあります。そのために、年会・秋季総合分科会の開催、各種出版物の発行、日本数学会賞による顕彰、高木レクチャーや日本数学会季期研究所の開催、市民講演会や藤岡おもしろ数学教室の実施など多彩な活動を行っています。

以前理事を務めてから数年が経過しますが、その間に日本数学会の活動が大きく広がっていることを、このたび改めて認識しました。文部科学省内の「数学イノベーションユニット」との連携、韓国・台湾等のアジアの数学会との友好関係、ジャーナリスト・イン・レジデンスの活動等です。秋季総合分科会では、大韓数学会・台湾数学会の推薦による特別講演が行われます。昨年は日韓数学会合同会議があり、今年プサンで開催される AMC には多数の日本人数学者が参加し講演します。来年は韓国で ICM が開催されます。また、12月に高雄で開催される台湾数学会の年会では、日本数学会の推薦による特別講演が行われます。中国との関係では、以前、数学通信の中国特集で執筆を依頼した馬志明中国科学院教授は「数学通信からの依頼で中国の数学研究がやっと世界に認められたと実感した」と述べています（科技日報記事より）。

日本数学会は最近、一般社団法人に移行しました。オンライン講演申込みやアブストラクト投稿等のウェブ環境も飛躍的に向上しています。もちろん、これらは多くの方々のご尽力なくしては実現しなかったものです。かかわってこられた方々に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

この原稿は、フランス・レンヌ滞在中に書いています。フランスでは前大統領時代の基礎科学振興政策により昨年 COE の選定が行われ、数学では 8 か所が同時に採択されたとのこと。レンヌのルベグセンターはその一つで、予算規模は 8 年間合計で 700 万ユーロとのこと。日本の COE に遅れること 10 年での開始ということになります。この資金は建物の建築には使えず、フランスでは優秀な人は割合すぐに職が得られるようで良いポストクの獲得も難しい、秘書は非常勤を一人雇っただけといった様々な苦労話を聞きました。「オープニング研究集会」のテーマは確率論と解析（偏微分方程式）ですが、来年はトゥールーズの COE で同様のテーマで研究集会を開催するそうです。アイデアもすぐ尽きると、ぼやきも聞こえてきました。

このフランスの COE はドイツに触発された面が大きいとのことですが、ドイツでは数学関係の COE はボンが 6 年半前にハウスドルフセンターとして採択され、5 年間を経て昨年さらに 5 年の延長が認められたそうです。フランスが全国に広く資金をばらまくのに対し、ドイツは一か所集中型です。ちなみにハウスドルフセンターの現在のディレクターは私の専門に近い確率論の Sturm 教授で、ハウスドルフ研究所はセンターの活動の一つという位置づけです。予算規模は 1 年間 500 万ユーロときわめて大きいものです。

さて、私が所属する東大数理の動きについても触れておきたいと思います。平成 23 年度にスタートした文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」事業に対し、数理科学研究科が主体となって申請した「数物フロンティア・リーディング大学院」（プログラム責任者：坪井俊研究科長、プログラムコーディネーター：河野俊丈教授）が昨年 10 月に採択されました。このプログラムでは、コース生に毎月奨励金を支給する経済的支援があり、博士後期課程で 3 ヶ月から半年の海外の研究機関等への長期派遣または企業等におけるインターンシップを課しています。プログラム採択の影響もあったと思われませんが、この 4 月の博士後期課程への進学者は 33 名（内、留学生 3 名）を数え、最近にない多さとなりました。

さらに、今年が 2 回目になりますが、「数学の魅力——女子中高生のために」という催しを 3 月に開催しました。反響は非常に大きく来場者は付添いも含め 200 名を超えました。アメリカの大学に勤めるイタリア人女性教授によると、イタリアでは女性であることを意識したことは全くなかったが、アメリカでは女性は少なく（と言っても、彼女の場合スタッフ 65 名中 5 名が女性だそうですが）苦労が絶えないとのことでした。フランスでも会議の男女比は決まっていますが、その分女性研究者に負担がかかるそうです。東京大学の取り組みが直ちに女性研究者の育成につながるのかどうかわかりませんが、こうした地道な努力を続けていくことが大切だと思います。

2015 年は小平邦彦先生、伊藤清先生の生誕 100 周年に当たります。日本数学会では記念事業を企画しています。

最後に繰り返しになりますが、会員の皆様方には暖かいご支援をいただきますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。